

錦織監督

映画の現場から



近年、デジタル機器が私たちの生活を著しく発展させた。私自身、フランスにいる時、インターネットを通して音楽家から送られた、映像に劇版音楽、いわゆるBGMを貼り付けた素材を、何百^キも離れた場所で見ながらタイムリーに打ち合わせができた。随分便利になったもの

●○●
3

世界と離れる日本の常識

しかし現在、編集はほとんどパソコンを使って行う。私もアビットという編集ソフトで編集している。音楽付けや効果音付けなどもデジタル素材を使って行うことが多く、人の手での作業は編集データを基に撮影素材に一度だけハサミを入れ、つなぎ合わせるだけ。デジタル機器やＩＴが映画作りにも、無くてはならない存在になっている。

しかし、欧米諸国をはじめ、インドや中国、韓国などアジア諸国を含めた世界中の多くの国は、撮影、上映共にフィルムが主流である。それはフィルムがはるかに高画質であり、100年先にも残る可能性があるから。日本では上映自体をフィルムレス、いわゆるデジタルコンテツツとして上映する日も近く、ハイビジョン式カメラで撮影される映画は8割にも及ぶ。良くも悪くも世界の常識と日本の常識は映像の世界でも違っている。

世界では映像の王様であるフィルムが、日本では過去のものだというイメージさえある。真実ではないことを思い込みでそう信じている人があまりにも多いことに驚かされている。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載

映画「うん、何？」の一場面から「島根の自然はフィルムで撮って遺（のこ）した
い」

